



1 本市の現状

◆気象

本市の気温は、岐阜県内では比較的高く、夏季には30℃を超えることが珍しくありません。降水量も比較的多く、高温多湿が特徴ともいえます。(関連資料：資料編 図12、表5)

本市の気温の推移をみると、年々の変動はありますが、年平均気温は長期的に右肩上がりです。上昇しています。(関連資料：資料編 図13)

◆人口・世帯数

岐阜市の人口は、2006(平成18)年の市町合併により一時的に増加しましたが、現在は減少傾向にあります。一方、世帯数は増加しているものの、一世帯あたりの構成人数は減少しています。

(関連資料：資料編 図14)

◆自然環境

岐阜市は美濃山地と濃尾平野の境に位置しています。市域の東部から北部には美濃山地の南縁部にあたる丘陵と低山があり、南部から西部は濃尾平野の北縁部にあたる地域であり、平野、段丘、扇状地を含む地形となっています。

本市の山地は、標高417.8mの百々ヶ峰を最高峰として、本市北部から各務原市にかけて西北西～東南東へ低山ながらも険しい山地が連なっています。また、山地には洞と呼ばれる谷戸地形が形成されています。

平野部は、長良川・木曾川などによって形成された金華山付近を扇頂とする扇状地と、その下流側に位置する氾濫原からなっています。氾濫原も一様に平坦ではなく、旧河道と自然堤防、後背湿地などの微地形が形成されています。

長良川は、市内を北東から南西にかけて大きく分断するように流れており、中流域から下流域へと移行する位置にあたります。市内の大半は礫質の河原が見られる中流域的な河川景観が続きますが、河口から約40km上流の本市南西部からは、流れの緩やかな下流域へと変化し、長良川河口堰の湛水域へと続きます。長良川の支川の多くは、南西部の市境付近で長良川に合流しています。農業用のため池は市内に広く分布しており、これらのため池や支川をつなぐ水路(用水路・排水路)が市内平野部に張り巡らされています。広い平野部には水田を中心とする農地と宅地が分布しています。



資料：Esri 社 衛星画像

図4 空から見た岐阜市



金華山



長良川(右岸プロムナード)

2 岐阜市の動植物

岐阜市内には多様な自然環境があり、それぞれの環境に適応した生きものが生息・生育しています。

これまでに実施した「岐阜市自然環境基礎調査」、「岐阜市版レッドリスト・ブルーリスト2015」、「岐阜市版レッドデータブック・ブルーデータブック2023」の作成、「岐阜市の自然情報継続調査」により、市内では660科5,939種もの動植物が確認されています。

表1 岐阜市内で確認された生物の科種数

分類群名	科数(科)	種数(種)
植物	176	1,777
哺乳類	19	39
鳥類	59	250
爬虫類	11	23
両生類	8	19
魚類	20	107
昆虫類	324	3,567
貝類	35	139
甲殻類(十脚類)	8	18
動物小計	484	4,162
合計	660	5,939

注) 科種数は「岐阜市の注目すべき生きものたち」(2023(令和5)年岐阜市)に新たな記録種を加えて整理した。

◆植物

岐阜市の植生は、ヤブツバキクラス域に属し、北部丘陵地にはアカマツ林やスギ・ヒノキの植林地、クリ、コナラ、アベマキなどが生育する落葉広葉樹林が分布し、シデコブシ、ヘビノボラズなどの東海丘陵要素の植物も生育しています。また、よく管理された雑木林では、カタクリ、ショウジョウバカマ、タチツボスミレなどの春の草花にも出会えます。

中央部の金華山にはツブラジイ、アラカシ、ヤブツバキなどが生育する常緑広葉樹林が広がり、麓の谷津田周辺にはヒメコウホネ、ヒメカンアオイ、ノハナショウブなどが生育しています。

市内中央を流れる長良川沿いでは、カワヤナギ、エノキ、ムクノキなどの河畔林やモウソウチク、メダケなどの竹林、ヨシ、ススキ、オギなどの草地が形成され、礫河原に生育するカワラサイコ、カワラハハコ、カワラヨモギなども見られます。

南部平野部の水田では、オグルマ、ミソハギ、ミゾコウジュなど湿潤な環境を好む植物が生育して、水路、河川にはコウホネ、エビモなどの水生植物が生育しています。

近年、岐阜市内でも毎年のように新しい外来植物が発見されているため、その動態にも注意が必要となっています。

(関連資料：資料編 図20)



ツブラジイ



カタクリ(岐阜市準絶滅危惧)

◆哺乳類

哺乳類は、北部の山地でニホンカモシカが確認されており、イノシシ、ニホンジカのような大型動物も見られますが、本市に生息する哺乳類の多くは、ムササビやニホンリス、タヌキ、アカギツネなどの里地里山の環境に依存する中・小型哺乳類によって構成されています。一方、「特定外来生物」¹⁶であるヌートリアやアライグマなども確認されています。



ニホンカモシカ

◆鳥類

市内には山林、農耕地、果樹園、河川、市街地など様々な環境があるため、それぞれの環境を好む鳥類が生息しています。面積の割に鳥類相は豊かで、県全体で確認されている種の約78%が生息しています。北部の山林では、オオタカ、フクロウ、ヤマドリなどの大型の鳥だけでなく、ヤマガラやメジロなどの小鳥類を見ることができます。河川流域では、冬季、カモ類が越冬するほか、農耕地ではケリが繁殖し、シギやチドリの仲間が渡り途中に羽を休めていきます。



ケリ

◆爬虫類

爬虫類は、河川やため池ではニホンイシガメ、ニホンスッポン、クサガメ、「条件付特定外来生物」¹⁷であるミシシッピアカミミガメなどのカメ類、里地里山ではシマヘビ、アオダイショウなどのヘビ類が確認されています。また、民家、農地周辺などにはヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビが生息しています。



ニホンイシガメ（岐阜市絶滅危惧Ⅱ類）

◆両生類

両生類は、カエル類は本州中部の平野部で見られる種はすべて市内に生息しており、水田周辺にはナゴヤダルマガエル、ヌマガエル、山地部ではヤマアカガエル、ニホンアカガエル、タゴガエルなどがみられ、市内全域の水辺に特定外来生物のウシガエルが生息しています。

また、アカハライモリ、ヤマトサンショウウオが確認されています。



ニホンアカガエル（岐阜市絶滅危惧Ⅰ類）

¹⁶ 特定外来生物：特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）に基づき、海外起源の外来種であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から指定される。指定されると輸入、放出、飼養等、譲渡し等の禁止といった厳しい規制がかかる。

¹⁷ 条件付特定外来生物：2023（令和5）年、アカミミガメとアメリカザリガニは、特定外来生物に指定された生物のうち、通常の特定外来生物の規制の一部を当分の間、適用除外とする（規制の一部がかからない）生物として指定された。販売・頒布以外の飼育は可能であるが、野外への放流などはほかの特定外来生物と同様に規制される。

◆魚類

岐阜市では、湧水に生息するキタスナヤツメ、平野のため池や水田域の水路に生息するトウカイヨシノボリやタナゴ類のほか、海から川を上がってきたニホンウナギやカマキリ（アユカケ）、スズキなど、多様な環境に様々な魚類が生息しています。また、特定外来生物のブルーギルやオオクチバスが生息しているほか、最近ではカネヒラなど国内外来種¹⁸の確認が増えてきています。



ヤリタナゴ（岐阜市絶滅危惧Ⅱ類）

◆昆虫類

昆虫類は、雑木林ではギフチョウやミヤマセセリ、ため池や水田・水路ではコオイムシ、クロゲンゴロウ、タイコウチなどがみられます。一部の湿地ではヒメタイコウチ、コクロオバボタルといった分布が限られる希少な湿地性の昆虫類が生息しています。また、長良川の砂礫地ではカワラバッタ、河畔林のヤナギではヒラタクワガタやカブトムシがみられます。



ギフチョウ

◆貝類

貝類は、陸域の環境にはウスカワマイマイ、ウラジロベッコウなどの陸産貝類、水辺の環境にはヒメタニシやイシガイ、オバエボシガイ、カタハガイ、トンガリササノハガイなどの淡水産貝類が生息しています。本市の面積は県の2%程度の大きさにもかかわらず、岐阜県内で確認されている貝類の6割近くの種数が生息しており、本市が県内でも貝類の多様性が極めて高い地域だということを示しています。



オバエボシガイ（岐阜市絶滅危惧Ⅰ類）

◆甲殻類（十脚類）

甲殻類は、岐阜市内の長良川やその支流などの河川ではミゾレヌマエビ、スジエビ、テナガエビなどが、山地部の小さな流れではサワガニがみられます。また、海からモクズガニが上がってきて、産卵のために再び海へ戻るまで長良川などで過ごします。一方、河川、水路、ため池などに条件付特定外来生物のアメリカガザリガニや近年市内で確認されたシナヌマエビ、チュウゴクスジエビが広く生息しており、在来種に対する影響が懸念されています。



モクズガニ（岐阜市準絶滅危惧）

¹⁸ 国内外来種：もともとその場所に生息・生育していないにもかかわらず、人間の活動によって国内のほかの地域から持ち込まれた種。

◆レッドデータブック掲載種

岐阜市自然環境基礎調査のデータに基づき作成した「岐阜市版レッドリスト・ブルーリスト 2015」の作成後、さらなる調査を重ね、「岐阜市版レッドデータブック・ブルーデータブック 2023」が作成されました。本市で確認された種のうち 7.1%にあたる 420種が「岐阜市版レッドデータブック 2023」に掲載され、「岐阜市版レッドリスト 2015」よりも 45 種少なくなりました。



ウシモツゴ（岐阜市野生絶滅）

しかし、これは主に植物で調査の進捗により多くの個体が確認されたことや、魚類については、水産資源上の管理がされているものを除外したことなどが主な要因です。その他の分類群は概ね同数かやや増加し、両生類、貝類などの絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅰ類・絶滅危惧Ⅱ類）の種数は増加しました。

表2 岐阜市版レッドデータブック 2023 掲載種の分類群別カテゴリー別種数

カテゴリー	植物	動物								合計	
		哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	昆虫類	貝類	甲殻類		
絶滅	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	
野生絶滅	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	
絶滅のおそれのある種	絶滅危惧Ⅰ類	50 (72)	2 (2)	7 (8)	0 (0)	5 (1)	7 (7)	3 (3)	13 (8)	0 (0)	87 (101)
	絶滅危惧Ⅱ類	75 (100)	0 (0)	8 (4)	1 (0)	1 (2)	5 (7)	8 (8)	12 (9)	1 (2)	111 (132)
準絶滅危惧	109 (101)	8 (8)	9 (10)	1 (1)	2 (2)	8 (17)	8 (8)	11 (16)	2 (2)	158 (165)	
情報不足	33 (35)	0 (0)	0 (0)	4 (5)	3 (6)	6 (4)	8 (5)	6 (9)	1 (0)	61 (64)	
合計	268 (309)	10 (10)	24 (22)	6 (6)	11 (11)	27 (36)	28 (25)	42 (42)	4 (4)	420 (465)	

注) () は岐阜市版レッドリスト 2015 の掲載種数を示す。

注) 各カテゴリーの考え方は次のとおり。

絶滅：市内では、すでに絶滅したと考えられる種。

野生絶滅：市内において、飼育・栽培下でのみ存続している種。

絶滅危惧Ⅰ類：市内において、絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。

絶滅危惧Ⅱ類：市内において、絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。

準絶滅危惧：市内において、存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。

情報不足：市内において、評価するだけの情報が不足している種。

本市で確認された種のうち 4.6%にあたる 276 種が「岐阜市版ブルーデータブック 2023」に掲載されています。「岐阜市版ブルーリスト 2015」と比較して植物の掲載種数は減少していますが、これは前回リストでランクCに選定された種が定着せず自然消滅したことが要因と考えられます。爬虫類、魚類の掲載種数は増加していますが、ペットなど飼育個体が野外で確認されたことによります。貝類の掲載種数の増加は、新しい知見により外来であることが明らかになった種があるためです。

これらの種の中には、「外来生物法」¹⁹ によって特定外来生物として指定されている種や、2015（平成 27）年に環境省が公表した「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」²⁰ にリストアップされている種が含まれており、一部は、有害鳥獣として、あるいは生態系に影響を及ぼす外来種として駆除活動が行われています。

また、被害が顕在化していない侵入ランクBと侵入ランクCの種も数多く侵入しており、今後の環境の変化によって、それらの外来種の中から産業や生態系に被害を及ぼす侵略性²¹をあらわす種が出てくることも考えられます。

◆外来種の分布状況

市内 50 の地区ごとに「岐阜市版ブルーデータブック 2023」掲載種の分布状況を整理すると、市街地に近づくにしたがい、全記録種に対する掲載種の占める割合が増加していることがわかります。特に木之本、加納西、長良の3地区では、掲載種の割合が 50%を超えています。また、その周辺の三里、白山、徹明、華陽、早田、長良西、厚見、茜部の8地区では掲載種の割合が 30%以上となっています。

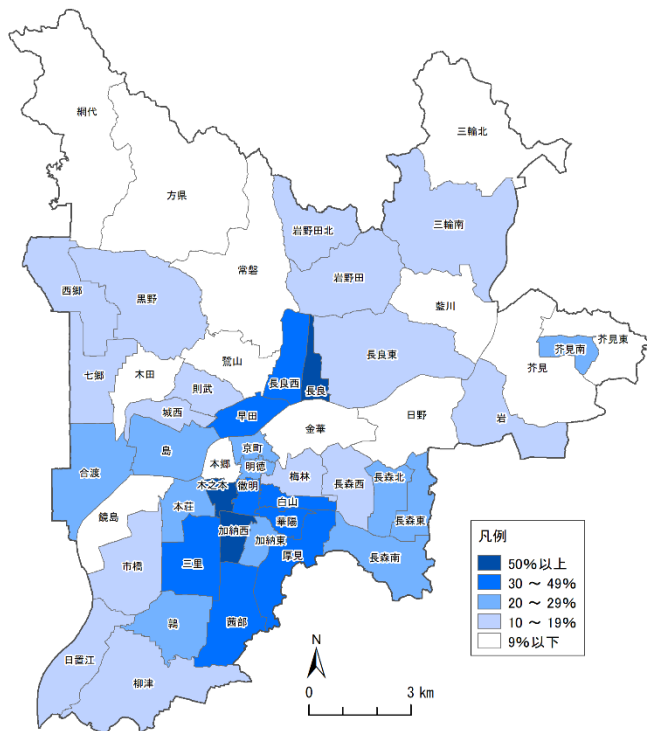


図6 岐阜市版ブルーデータブック 2023 掲載種の確認状況
注) この図は、これまでの調査データに基づき、詳細な確認地点がわかるデータから作成しました。なお、分類群によっては対象種を絞って調査を行っているため、すべての掲載種の正確な分布を示すものではありません。



アライグマ（岐阜市侵入ランクA）

¹⁹ 外来生物法：「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」のこと。特定外来生物による生態系、人の生命・身体、農林水産業に係る被害を防止し、生物の多様性の確保、人の生命・身体の保護、農林水産業の健全な発展に寄与することを通じて、国民生活の安定向上に資することを目的として 2005（平成 17）年に施行された。

²⁰ 我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト：生物多様性保全への関心と理解を高め、適切な行動を呼びかけるために作成された、生態系や人への影響が大きい生物のリスト。特定外来生物も含む。

²¹ 侵略性：地域の自然環境に大きな影響を与え、生物多様性を脅かすおそれが大きいことをいう。

3 人の暮らしと生物多様性

私たちの生活は多くの生きものが関わりあい、結びつくことで生まれる生物多様性の恵みによって支えられています。水や食料・木材・繊維、医薬品など日々の生活に必要なものを提供してくれるだけでなく、自然とのふれあいによって人々に安らぎをもたらし、森林は水源の涵養や二酸化炭素の吸収、水田は洪水防止に役立つなど、私たちの環境を守っています。また、伝統工芸品である岐阜和傘や岐阜提灯には、地域の竹や和紙などが活用されています。さらに、長良川を漁場とする長良川鵜飼は本市の伝統文化であり、私たちは自然の中で歴史や文化を育んできたことがうかがえます。

この生物多様性の恵みは「生態系サービス」とも呼ばれ、生物多様性は、これらの生態系サービスを安定的に提供するための土台となっています。例えば、絶滅のおそれのある動植物が増えれば、生態系のバランスが崩れて生態系サービスが損なわれ、私たちの生活に深刻な影響を与えます。つまり、生物多様性を守ることは、人の暮らしにとって生活の安全性や快適さを守ることにもつながる、重要な課題なのです。



コラム

生物多様性の恵みとは

私たちの暮らしは生物多様性の恵み（生態系サービス）によって支えられており、その恵みは大きく4つの種類に分けられます。

①供給サービス

食料、燃料、木材、繊維、薬品など私たちの暮らしに必要な資源を供給するサービスです。

現在、利用されている資源から、まだ発見されていない有用な資源まで、ある生きものが絶滅することは、将来にわたって資源の利用可能性がなくなることになります。



山菜の天ぷら

②調整サービス

森林によって洪水のリスクが低減されたり、水が浄化されたりなどの環境を制御するサービスです。これらの制御を人工的に行おうとすると膨大なコストが発生します。生物多様性が豊かであることは、環境の変化に対する安定性などを高めることとなります。



森林の水質浄化や気候調整機能

③文化的サービス

レクリエーション、伝統的な行事など生物多様性の恵みにふれるサービスです。例えばぎふ長良川の鵜飼は、長良川の生態系によって支えられており、生物多様性は、このような文化の基盤になっているといえます。



生物多様性が育むぎふ長良川の鵜飼

④基盤サービス

供給サービス、調整サービス、文化的サービスの供給を支えるサービスです。例えば植物などの光合成による二酸化炭素吸収や酸素供給、栄養循環、水循環などがあてはまります。



生きものの生息・生育地の提供

近藤 慎一



コラム

生物多様性の恵みを未来へつなぐためにできること

これからも生物多様性の恵みを享受していくため、私たちには何ができるでしょうか？

実は、動植物の生息地・生育地保全といった直接的な取組だけでなく、日々の暮らしの中でできることがあります。

岐阜市の文化や工芸品の多くは、自然環境、生物多様性と深く関係しています。例えば伝統工芸品である岐阜和傘、岐阜うちわなどは、材料となる良質な竹、エゴノキなどが必要ですが、これらは、その地域の自然環境、生物多様性が保全されていないと、その恵みを享受できません。

昨今、生活の利便性が向上し、生活様式の変化や食のグローバル化が進んだ結果、暮らしの中でそれらにふれる機会が減っています。文化や工芸品が失われれば、地域自然の活用が途絶え、これまで保たれてきた自然環境、生物多様性にも何らかの変化が起きるかもしれません。

だからこそ、自然の恵みを利用し、地域の文化や伝統を受け継いでいくことが、生物多様性保全への重要な一歩となります。私たちができることは、地元の伝統工芸品に関心を持ったり、地域の文化にふれたりすることです。

具体的な行動として、川や里山でとれた魚や山菜を食べてみたり、エコツアー²²に参加したりして自然環境や歴史・文化について学んでみるのはどうでしょうか。このような取組が積み重なれば、やがて生物多様性保全へと繋がっていくのです。



アユの塩焼き



岐阜和傘



岐阜うちわ



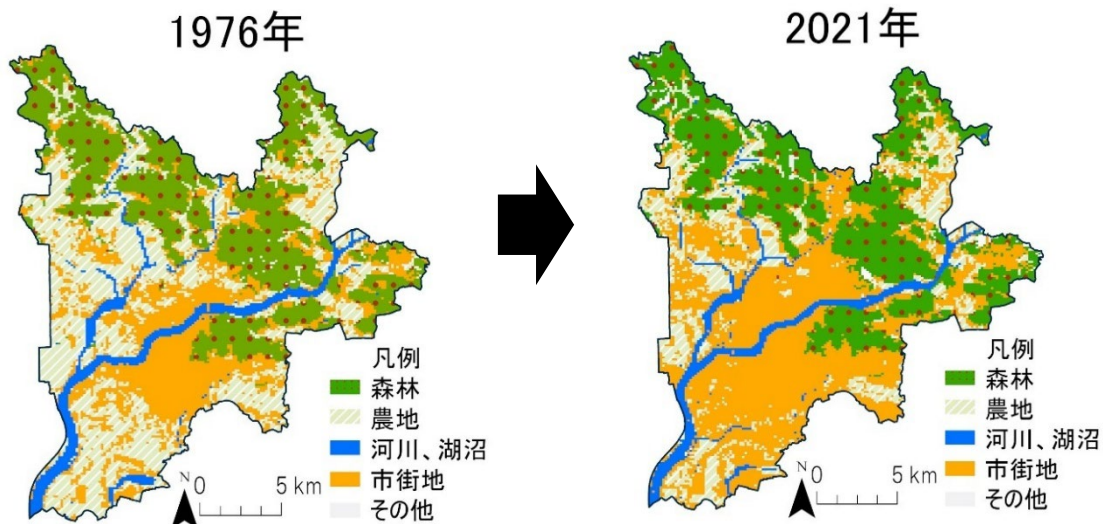
散策会

²² エコツアー：自然環境や歴史・文化を体験し、学ぶとともに、地域の自然環境や歴史・文化の保全に責任を持つ観光のありかたをエコツーリズムとよぶ。この考えに則って行われる地球環境に優しい旅行のこと。

4 自然環境の現状

(1) 土地利用の変遷

1976（昭和51）年と2021（令和3）年の土地利用を見比べると、この45年で農地が減り、市街地が拡大したことがわかります。面積割合で見ると、市街地（道路と宅地の合計）は26%から43%に増加し、農地は34%から18%まで減少しました。（関連資料：資料編 図15、図16、図17）



資料：国土数値情報

図7 市内の土地利用の変化

(2) 岐阜市内の保護地域

生物多様性国家戦略 2023-2030 に記載される陸域及び内陸水域の保護地域は自然公園、自然環境保全地域、鳥獣保護区²³、保護林²⁴、緑の回廊、天然記念物、県が条例で定めるその他保護地域などです。

本市では右の表のような地域が保護地域に該当し、市総面積に対する保護地域の割合は7.7%です。

国は、保護地域と保護地域以外で生物多様性保全に資する地域(OECM)を含めて、2030（令和12）年度までに30%とする目標、いわゆる30by30を掲げています。国全体の保護地域の国土面積に占める割合は2025（令和7）年8月現在、陸域21.0%、海域13.3%です。

表4 岐阜市内の保護地域の面積

保護地域		面積(ha)
市総面積		20,360
保護地域	自然公園	—
	都道府県自然環境保全地域 (岐阜県自然環境保全条例の自然環境保全地域)	—
	鳥獣保護区	1,579
	保護林	500
	緑の回廊	—
	天然記念物	—
	県が条例で定めるその他保護地域	—
	保護地域合計	1,579
市総面積に対する保護地域の割合		7.7%

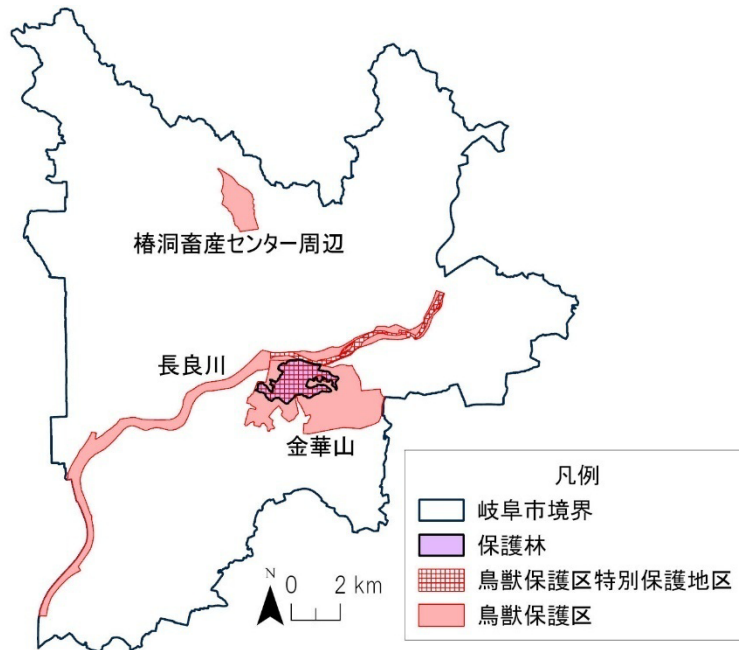
注1)保護地域の内訳は、生物多様性国家戦略2023-2030を参考にしており、岐阜市内には面積で指定された天然記念物はない。

注2)保護林は鳥獣保護区と重複するため、合計値に含まれない。
資料:WDPA Protected planet、環境省 生物多様性「見える化」マップ

²³ 鳥獣保護区：鳥獣の保護のために狩猟が禁止された区域。

²⁴ 保護林：原生的な天然林などを保護・管理することにより、森林生態系からなる自然環境の維持等に資することを目的としている国有林野のこと。

また、生物多様性国家戦略における保護地域には計上されていませんが、本市では岐阜市自然環境の保全に関する条例に基づき達目洞のヒメコウホネ自生地が特別保全地区に指定されており、土地の改変等の行為が規制されています。



資料：岐阜県ホームページ、岐阜県統合型 GIS（令和7年度岐阜県鳥獣保護区等位置図）

図8 市内の保護地域の位置

(3) 環境区分

本市の環境を生きものの生息・生育環境として見た場合、山地、農地、市街地、河川に大別できます。これらの環境ごとに、生息・生育する動植物や本市で行っている取組についてまとめました。

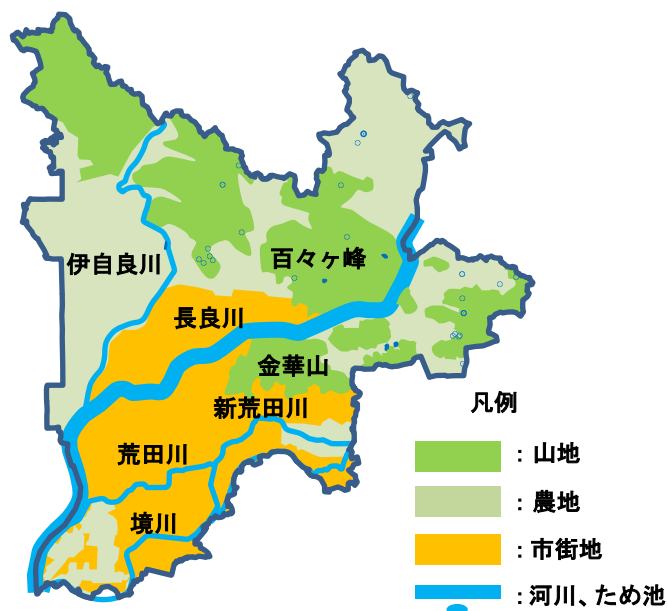


図9 市内の生息・生育環境

山 地

◆山地の生物多様性の現状

本市の北西部から東部にかけて連なる山地には、古くから薪炭利用などの人の営みとともに発達してきたコナラ、アバマキやアカマツなどで構成される雑木林と植林されたスギ、ヒノキによって構成される植林地が広がっています。こうした雑木林と植林地は里地の伝統的生活空間から連続的につながっており、里地里山を必要とする動植物の生息・生育環境となっています。また、洞地形に形成された湿地が残されている環境では、東海地方の湿地特有のシデコブシ、ヘビノボラズが生育し、ヒメタイコウチ、サシバが確認されています。また、湿地や山裾の水路にはホトケドジョウも生息しています。

金華山は、本市の山地の中では特殊な地区であり、市街地に隣接するように森林が発達しています。また、江戸時代から樹木の伐採が制限されてきたため、気温から推測される本市の本来の植生であるツブラジイなどの常緑広葉樹林が、本市では金華山にのみ発達しています。

本市の山地は、金華山を除いて人の営みによって形成された雑木林と植林地であるため、薪炭林などを利用する里山管理が行われなくなることで、環境が大きく変化しつつあります。また、里山における人の営みの減少とともにイノシシ、ニホンジカやニホンザルによる農作物への獣害が起きています。これらの哺乳類の増加は、農作物への被害を生じさせるだけでなく、森林の植生も変化させています。イノシシは金華山でも増加しています。こうした環境変化が著しいことから、これらの地区の在来種の多くは「岐阜市版レッドデータブック 2023」に掲載されています。

また、人の出入りの多い金華山は、山地としては外来種が多く、1936（昭和11）年に岐阜公園で開催された躍進日本大博覧会で飼育展示されていた個体に由来するとされる特定外来生物のクリハラリス（タイワンリス）が定着し、特定外来生物のソウシチョウも確認されています。



岐阜市内の里地里山（左：達目洞、右：大洞）



コラム

いろいろな森

森の視点から見ると、岐阜市域の本来の姿は、常緑広葉樹に覆われた場所であったと考えられています。岐阜市には、金華山をはじめ「いろいろな森」があります。岐阜市のシンボルともいえる金華山の森、実は、太古から今の姿が保たれてきたという意味での「原生林」ではありません。江戸時代の立ち入り制限、明治以降の厳しい保護（禁伐）によって、常緑広葉樹の森となったものです。岐阜市内のほかの山々は、金華山と違い、アカマツやコナラで構成される明るい森やヒノキ、スギなどが主となっている人工林がほとんどです。これらの森は、つい最近（森の時間軸でいうところの「最近」）ですので、人の感覚からいうと「チョット前」かな・・・）まで、暮らしのために森から様々なものを得る＝人手が入ることによって、その姿が形づくられてきました。いずれの森も、森と人との関わりの中で形づくられてきたのです。つまり、いろいろな「関わり」があったからこそ、いろいろな森が存在するわけです。人のライフスタイルが変化するのに伴って、森と人との関わりも変化していきます。そんな中で、いろいろな森をどのように保全していくのかを考えていかなければならないと思います。

伊藤 栄一

◆保全に向けた取組

山地は、自然とふれあう場としても利用されており、多くの市民や観光客が訪れる金華山の登山道は、自然環境保全活動団体に認定されている金華山サポーターズ²⁵や第3ブロック青少年育成市民会議²⁶が定期的に整備を実施しています。本市では、ながら川ふれあいの森²⁷や岐阜市畜産センター公園²⁸が整備されており、百々ヶ峰、城ヶ峰、御望山なども登ることができます。ながら川ふれあいの森では、自然環境保全活動団体である NPO 法人ふれあいの森自然学校²⁹が定期的に自然観察会を開催しており、同じく自然環境保全活動団体である NPO 法人ぎふし森守クラブ³⁰は、間伐、炭焼きなどの保全活動を実施しています。岐阜市畜産センター公園では NPO 法人ふれ



岐阜市畜産センター公園

²⁵ 金華山サポーターズ：20年以上にわたって、登山道整備など、金華山の保全に関わる活動をする自然環境保全活動団体。

²⁶ 第3ブロック青少年育成市民会議：ブロック内の5つの中学校からボランティア活動をする中学生を募り、指導者とともに金華山の登山道の整備活動をする自然環境保全活動団体。

²⁷ ながら川ふれあいの森：岐阜市の最高峰である百々ヶ峰を擁する233haに及ぶ管理区域。

²⁸ 岐阜市畜産センター公園：椿洞地区にある畜産センターを中心としたハイキングコースがある広大な公園。

²⁹ NPO 法人ふれあいの森自然学校：ながら川ふれあいの森、岐阜市畜産センター公園などで自然観察会やクラフト体験などを開催する自然環境保全活動団体。

³⁰ NPO 法人ぎふし森守クラブ：ながら川ふれあいの森を中心に、間伐、炭焼きなど環境保全活動などを実施する自然環境保全活動団体。

あいの森自然学校が定期的に自然観察会を開催しています。また、百々ヶ峰と舟伏山周辺は風致地区³¹として開発行為に制限があり、金華山は保安林³²、鳥獣保護区の特別保護地区³³、砂防指定地³⁴、風致地区、史跡³⁵などに指定されているために開発できません。(関連資料:資料編 図18、図19)

金華山は長良川とともに、国重要文化的景観「長良川中流域における岐阜の文化的景観」の選定範囲にも含まれています。

さらに、2025(令和7)年3月には「岐阜市民公園の再整備基本計画」が策定され、岐阜市畜産センター公園の西側にある里山などの丘陵部については、生物多様性保全を推進することとしています。



コラム

岐阜市民公園の再整備計画

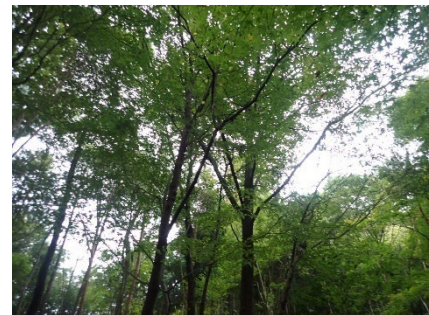
岐阜市畜産センター公園として親しまれている岐阜市民公園は、本市を代表する総合公園です。園内には、広大な芝生広場、四季の移り変わりを楽しむことができる里山、動物とふれあえる乗馬施設などがあります。

この公園は、市内屈指の豊かな自然に恵まれており、希少な動植物が生息・生育するなど、良好な里山環境が大切に保全されています。

その一方で、施設の老朽化、未利用施設の整理、樹木の老木化などの課題に対応し、より一層の魅力を生み出すため、2025(令和7)年3月に「岐阜市民公園再整備計画」を策定しました。

この再整備計画では、この希少な動植物が生息・生育する良好な里山環境を次世代へ引き継いでいくため、保全に関わっている環境活動団体、高校の自然科学部の方々などと丁寧な打ち合わせを行いました。

実際に再整備が始まるのはこれからですが、この良好な里山環境をよりよい状態で引き継いでいけるよう、今後も保全に関わっている方々と連携して進めます。



岐阜市民公園のアベマキ

³¹ 風致地区：趣のある自然的景観を維持するために定められる地区で、建築や宅地の造成等の開発に一定の規制がある。

³² 保安林：水源の涵養、土砂の崩壊その他の災害の防備、生活環境の保全・形成等、特定の公益目的を達成するため指定された森林で、立木の伐採や土地の形質の変更等が規制される。

³³ 鳥獣保護区の特別保護地区：鳥獣の保護のため狩猟が禁止された地域(鳥獣保護区)のうち、生息地の保護のため工作物の新築や立木の伐採などが規制される地区。

³⁴ 砂防指定地：土砂災害を防止するため、砂防設備を必要としていたり、立木の伐採や土石の採取などを規制している区域のこと。

³⁵ 史跡：遺跡のうち歴史上または学術上価値の高いもの。国や自治体によって文化財に指定される。

農地（用水路・排水路、ため池を含む）

◆岐阜市の農地の特徴

2025（令和7）年の資料によると、農地は本市の面積の約17%を占めており、耕地面積の77%は水田となっています。水田周辺には灌漑用の用水路・排水路が張り巡らされており、爬虫類、両生類、魚類、貝類、水生昆虫などの重要な生息環境となっています。また、岐阜市のため池台帳には35の灌漑用のため池が記載されており、台帳にないものを含めると少なくとも47のため池が作られています。（関連資料：資料編 表6）

◆農地の多面的機能

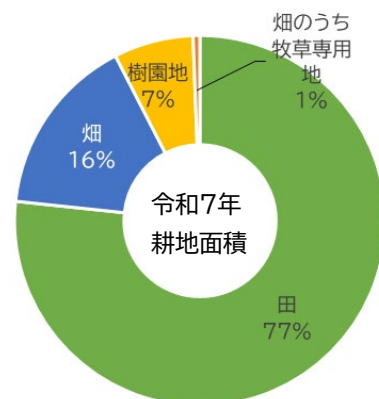
水田やため池は食糧生産の場であるとともに、降雨時における遊水地としての機能もあり、河川の増水を緩和したり、洪水時に市街地の浸水被害を軽減したりするなど、NbS（Nature-based Solutions）の1つであるEco-DRR³⁶（Ecosystem-based Disaster Risk Reduction）としての防災機能もあります。さらに、様々な水生生物の生息に必要な一時的な水域としての機能も兼ねることになるため、水田やため池の維持には、生物多様性、食糧生産、防災など多面的な意味があります。

◆農地の生物多様性の現状

魚類や二枚貝類については、水田周辺の水路がコンクリート化されることで、泥底の緩やかな流れの水路が失われ、生息地が減少している種が目立ちます。本市のウシモツゴは、かつては水田周辺に生息していたとされますが、すでに野生では絶滅しています。カワバタモロコは、北部と南部で各1地点から記録がありますが、非常に個体数が少なく、絶滅寸前となっています。イシガイ類などの二枚貝の生息地も著しく減少しており、二枚貝に産卵するタナゴ類の中のイチモンジタナゴやシロヒレタビラは、ごく一部の水路にしか生息していません。ただし、水田とその周辺に生息する魚類の中では、フナ類やミナミメダカは現在でも多数生息しています。

灌漑用のため池も、コンクリートによる護岸が施されるなどの改修工事が行われるとともに、多くの池にコイやオオクチバス、ブルーギルが放流されることで、在来種の水草や小魚の生息・生育地が失われています。ジュンサイは、ため池に生える水生植物ですが岐阜市では絶滅しており、トウカイヨシノボリも北西部のため池にのみ生息しています。

鳥類の中では、バン、ケリ、タマシギなどが水田や休耕田、湿地に生息しますが、農地転用などが進んでいることから、いずれも減少しています。またウグイス、ヒヨドリなどは山際の雑木



資料：岐阜市農林課

図10 耕地の利用状況

³⁶ Eco-DRR：「Ecosystem-based Disaster Risk Reduction」の略称。健全な自然生態系の機能を活用することで、災害のリスクを軽減し、地域の持続可能な発展と生物多様性保全を両立させること。

林やそれらに繋がる雑草が繁茂した農地などに生息しています。雑草が繁茂した農地などは、哺乳類のタヌキ、キツネなどが生息場所として利用しています。外来種であるアライグマ、ハクビシンなどもこのような環境を利用して生息するようになっていきます。

◆保全に向けた取組

岐阜県では、化学農薬や化学肥料の適正使用に取り組む「ぎふ清流 GAP 評価制度」、「岐阜県有機農業推進計画」が進められており、農薬などの影響が少なくなったことで、岐阜市内でもタガメのような肉食の大型水生昆虫の生息状況がやや改善しています。本市ではすでに多くの水田が圃場整備事業などによって改修されていますが、金華山の東にある達目洞では逆川に生育するヒメコウホネ群落の保全が行われ、周辺の水田とともに岐阜市の里山の原風景が残っています。



コラム

ヒメコウホネの生きる達目洞

達目洞は、金華山の東山麓にあり、照葉樹林、湿地などが調和した日本の原風景が残る里山です。そこには逆川（さかしまがわ）という小川が流れ、絶滅が危惧されるスイレン科の植物「ヒメコウホネ」が生育しています。ほかにもキツネノカミソリ、コクロオバボタル、カヤネズミなど貴重な動植物が生息・生育しています。

この場所に 30 数年前、岐阜環状線道路の建設が計画され、市民団体「岐阜・まちづくりの会」がこの自然環境を守ろうと様々な活動を行いました。そして木道を設置したことをきっかけとして、2002（平成 14）年、「達目洞自然の会」³⁷が発足しました。

かつて織田信長公が達目洞で鹿狩りを行ったところ、78 頭も獲れたという話があります。江戸時代に入って、臼井岩入という武士が、湿地に小川を通して水はけをよくし、水田をつくりました。20 数年前に耕作放棄地となってしまう、達目洞全体の環境保全を進めるため、「達目洞自然の会」で、お米づくりをすることにしました。田植えと稲刈りは、それぞれが大きなイベントとなっており、小さな子どもたちを含む親子、学生など 100 人以上が集まります。

お米づくりは、農薬や化学肥料を使わずに、種もみから苗を育てて植えているので、草取りが大変です。ですがコバネイナゴ、キリギリスなどのバッタの仲間、ヌマ



達目洞のヒメコウホネ



達目洞での田植え体験

³⁷ 達目洞自然の会：ヒメコウホネをはじめとする貴重な動植物の保全、お米づくり、湿地環境の再生と復元、外来植物の除去など達目洞において生物多様性のための活動を実施する自然環境保全活動団体。

ガエル、トノサマガエルなどのカエルの仲間、ヤマカガシ、マムシなどのヘビの仲間など多くの生きものを見ることができます。

「達目洞自然の会」は、毎月、定期的に保全活動を行っており、お米づくり以外にもヒメコウホネをはじめとする貴重な動植物の保全、湿地環境の再生、外来植物の除去、自然観察会などを行っています。外来植物は根から引き抜き、お米づくりの堆肥として活用しています。除草を地道に続けていることから、外来植物は減少し続けています。最近ではヌートリアやイノシシなどによる被害が悩みの種です。

達目洞は、岐阜市の生物多様性保全を考える上で、モデル地区ともいえる場所で、市民と行政との協働により、生物多様性が良好な状態で保たれています。

加納 一郎



コラム

石田川、伊自良川と周辺の農業用排水路の関係

岐阜市の北東部を流れる石田川、北西部を流れる伊自良川は、岐阜県が管理し、良好な生物多様性が比較的、維持されている河川です。この2つの河川には、二枚貝類に産卵して繁殖するアブラボテ、ヤリタナゴなどのタナゴ類、カワヒガイなどの魚類を確認することができます。しかし、これらの魚類を確認できるにも関わらず、この2つの河川で二枚貝類を確認できることはあまりありません。

実は二枚貝類は、河川の中にはなく、2つの河川につながっている農業用排水路に多くが生息しています。農業用排水路は市が主に管理しており、地元の方々とも連携し、適切な状態の維持に努めています。

河川と用排水路のつながりも非常に重要で、タナゴ類やカワヒガイは、河川から用排水路へ移動できなければ二枚貝類に産卵できません。そして二枚貝類も、幼生が寄生するオイカワやカワヨシノボリなどの魚類が移動してこなければ繁殖できないのです。

石田川と伊自良川の生物多様性を保全するためには、河川だけでなく、河川につながる用排水路も適切に保全することが必要です。



二枚貝類が生息する水路



採集された二枚貝類

市 街 地

◆市街地の生物多様性の現状

本市の市街地は、市の中央部から南部にかけて位置しており、長良川で南北に分断されています。岐阜駅周辺や繁華街などにはほとんど植生もなく、市街地に適した外来種を除いて野生の動植物はほとんど見られないように思われがちですが、本市の場合は、三面コンクリート張りで大部分が暗渠になった水路であっても魚類が生息している場所がところどころに見られます。これは、下水道の普及によって生活排水が水路に流れ込むことが少なく、長良川などの河川や周辺の水田との間に高低差がほとんどないため、オイカワ、タモロコ、ニゴイ、フナ類、ミナミメダカなどが降雨時に増水した水路を通じて進入するものと考えられます。また、コンクリート二面張りで川底が砂泥、かつ長良川からの伏流水などの湧出によって水が枯れることのない場合は、イトモロコやヌマムツ、タナゴ類なども見られます。市街地の中心部から少し離れると住宅の間に孤立した水田が点在し、ケリなどの鳥類、ニホンアマガエル、ヌマガエルなどが見られます。

民家が多い地域でもニホンヤモリや、建造物の隙間をねぐらとして使うアブラコウモリが見られます。中心部の金公園付近の街路樹やビルの屋上には秋から春先にかけて数千羽のハシボソガラス、ハシブトガラスが集団ねぐらをつくり、また、スズメやムクドリも街路樹をねぐらにしています。あえて人の生活圏で生活することで外敵から身を守る行動と思われる。

また街路樹には、景観向上、防災機能など様々な機能があることから、外来種も含めて様々な種類が植樹されています。さらに公園においては、公園ごとに、長良公園³⁸のメタセコイアなど、その公園を特徴づける様々な種類が植樹されています。

本市の土地利用を見ると、農地が減り市街地が増えています。外来種が多いのが市街地の特徴ですが、在来種も残存しており、多少の環境改善によって多くの在来種の動植物が生息・生育できるようになる可能性があります。

◆保全に向けた取組

本市では、緑地の保全のため「岐阜市みどりの基本計画 2022」や「岐阜市グリーンインフラ計画」に基づき、街路樹や公園等の適正な管理や壁面緑化、屋上緑化の推進に取り組んでいます。これらの計画では、気候変動の緩和や適応、生物多様性の保全も推進するべき取組としています。このような取組は、NbS の1つといえます。



長良公園



岐阜駅前の壁面緑化

³⁸ 長良公園：もともとは岐阜大学のキャンパスであったが、移転に伴い、季節の花々が彩る公園となった。

河川（長良川と支流）

◆河川の生物多様性の現状

本市は北東から南西にかけて中央を長良川が流れており、金華山とともに、国重要文化的景観「長良川中流域における岐阜の文化的景観」として選定されています。また、長良川では水環境や生物多様性を保全しながら漁業や伝統文化を育んできた「長良川（里川）のシステム」が世界に認められ、「清流長良川の鮎」（里川における人と鮎のつながり）として世界農業遺産に認定されています。長良川は郡上市の大日ヶ岳を源流とする流程 166km の河川であり、本市は、中流域から下流域へと移り変わる位置にあたります。かつては海から遡上するボラ、スズキ、マハゼなどが多産したとされますが、現在ではいずれも減っています。アジメドジョウのような中流域の水質のよい環境を好む淡水魚も本市内の長良川に広く分布します。また、春に海から遡上したアユは中流域から上流域で成長し、秋には中流域下部に集まって産卵するため、本市内の長良川にはアユの非常に重要な産卵場があります。

長良川の広い河川敷は、多くが砂礫からなる自然裸地になっていますが、カワラハハコやカワラヨモギなどの礫河原に適応した植物が群落を形成し、全国的には減少しているカワラバツタのような昆虫類も生息しており、イカルチドリが繁殖します。また、オギやツルヨシによる草地、ヤナギやエノキの河畔林やモウソウチクなどの竹林も形成されており、多様な環境をつくり出しています。一部では公園や運動場として利用されているところもありますが、オギやツルヨシの草地にはカヤネズミなどの草地性の動物が生息し、ホオジロやモズが繁殖しています。竹林には微小巻貝類やそれを餌とするヒメボタルが生息しています。また、夏季には、河川敷に生えるヤナギ類にカブトムシやヒラタクワガタなど多くの昆虫類が集まります。

長良川には、右岸から伊自良川、左岸から荒田川や境川などの支川が合流しています。右岸側の支川は山地から流入するために自然度が高く、特に伊自良川には、冷水を好むハリヨ、キタスナヤツメ、氾濫原などに適応したデメモロコなどの様々な希少淡水魚が生息しており、多くのカモ類も越冬します。河川敷に発達した河畔林は小動物や小鳥類の生息地であり、オオタカやノスリなどの餌場にもなります。一方で、近年、防災上の理由から河畔林の伐採などが数年の間に大規模に実施されることによって、河川敷の環境が一度に変化してしまうということも懸念されます。

左岸側の支川は市街地から生活排水などが集まるために、近年、状況は改善しているものの、右岸側の支川と比較すると、やや水質がよくありません。市街地に流入する前の水田地帯にはイトモロコやトウカイコガタスジシマドジョウなどが生息します。また、水質がよくない場所でも



産卵にむけて群れるアユのオス



アユの卵

コイ、フナ類、オイカワ、タモロコ、ゼゼラなどが多数生息し、夏季には海から遡上したボラも見られます。

長良川の本川、支川、河川敷には、在来種も多数生息・生育していますが、外来種も増加しています。魚類ではオオクチバスが本川、支川ともに広く生息し、流れの緩やかな場所で産卵して繁殖しています。荒田川や境川にはカダヤシが多く、カラドジョウも定着しています。長良川本川には琵琶湖由来のギギヤハスが生息し、市街地近辺では熱帯魚のレッドテールキャットフィッシュ、マダラロリカリア、ナイルアロワナなどが遺棄放流されたことも確認されています。また、令和5年には市内で初めてコクチバスが確認されました。魚類以外に、チュウゴクスジエビが境川、大江川、新荒田川で確認されています。また、ヌートリアが本川、支川ともに広く生息しており、支川ではミシシippアカミミガメも多数生息しています。河川敷の植生もシナダレスズメガヤやセイバンモロコシなどが増加しています。また、堤防には広範囲にわたってオオキンケイギクが群生しているため、駆除が行われています。

◆保全に向けた取組

本市の新堀川（伊自良川支流）の上・下流域は、東海地方で貴重な種や固有種が生息しており、全国的に減少傾向のある二枚貝類、タナゴ類の生息地としても貴重な地域です。当該地域は、環境省により生物多様性の観点から重要度の高い湿地（重要湿地）として選定されています。また、市内の長良川流域は鳥獣保護区に指定されています。



コラム

村山川の二枚貝救出作戦

岐阜市北西部を流れる村山川は、本市が管理する準用河川です。村山川は良好な生物多様性が比較的、維持されている河川で、濃尾平野では激減している二枚貝類が数多く生息しています。二枚貝類が数多く生息していることから、二枚貝類に産卵するアブラボテ、ヤリタナゴなどのタナゴ類も比較的、簡単に見ることができます。

村山川は、2025（令和7）年に開通した東海環状自動車道の岐阜インターチェンジに隣接しており、岐阜インターチェンジ設置に伴う建設工事の際、国と連携して改修工事を進めることになりました。

そのまま改修工事を施工すると、移動できない二枚貝類は激減する可能性がありましたが、貴重な村山川の生物多様性を保全しようと、工事関係者、岐阜市、岐阜大学、岐阜農林高校などが連携して生物多様性保全を進めることになりました。

まず2020（令和2）年、村山川の改修工事の施工前に、可能なかぎり、二枚貝類を採集し、安全な場所へ移設することになりました。採集した二枚貝類は、2/3を村山川の中の改修工事の施工区域外へ移設し、残りの1/3は過密を避けるため、同じ水系である岐阜大学構内の池で生息域外保全を行うことになりました。

そして改修工事を施工する際には、岐阜市、岐阜大学などから配慮事項を国、工事業者などへ伝え、良好な河川環境の維持に努めました。



種ごとに生息域外保全をされた二枚貝類

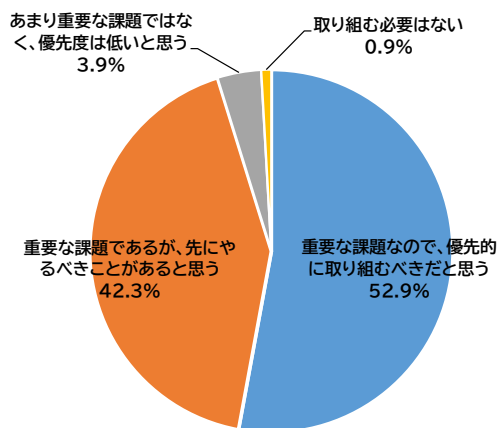


二枚貝類の分類作業

(4) 生物多様性に対する市民の理解

平成28年3月の「岐阜市生物多様性プラン」策定後、本市では生物多様性に対する市民の理解を促進するため、生物多様性に関連した環境教育や普及啓発を実施してきました。一方、令和4年度に行われた環境に対する意識調査アンケートによると、地球温暖化対策、ごみ減量、生物多様性の保全の3つの環境分野の課題に対する取組について、「重要な課題なので、優先的に取り組むべき」との回答が、地球温暖化対策は76.2%、ごみ減量は75.9%、生物多様性の保全は52.9%でした。ほかの環境分野の課題と比較すると重要な課題と考えている市民の割合が低いいため、生物多様性の保全に関する理解促進が引き続き必要となります。

Q.生物多様性の保全に取り組むことについて、どのように考えていますか。



資料：第5次岐阜市環境基本計画

図11 環境に対する意識調査アンケートの結果



水辺エコトーン（水陸移行帯）の保全と再生

岐阜市では、「岐阜市自然環境の保全に関する条例」により、「貴重野生動植物種」に指定されているヤマトサンショウウオをはじめ、11種類の両生類が「岐阜市版レッドデータブック 2023」に選定されています。最も危険度が高い絶滅危惧Ⅰ類に選定されている種は、「岐阜市版レッドリスト 2015」では1種だったのに対して、「岐阜市版レッドデータブック 2023」では、5種となっています。全体の選定種数は変わりがないため、それだけ両生類全般に危機が迫っているといえます。

モリアオガエルとシュレーゲルアオガエルは、水中ではなく、樹上や水田の畔などに泡状の卵塊を産卵しますが、カエル類、サンショウウオ類、イモリ類の多くは、水中で産卵し、幼生（いわゆるオタマジャクシ）は水中で生活します。

幼生は、水中で生活しているときはエラで呼吸しますが、やがて変態し、エラがなくなって肺呼吸するようになり上陸します。多くのカエル類、サンショウウオ類は水辺の近くの湿潤な環境で生活しますが、両生類の中には、繁殖期以外の時期に、水辺から数百メートルあるいは数キロメートル離れた場所で生活するものもいます。

両生類全般に危機が迫っている中、両生類がいつまでも生息できる環境を守るためには、両生類が繁殖期ではない期間に生活する陸域と、両生類が産卵し、かつ、幼生が生活する水域の両方を守らなければならないことは明白です。しかし、この陸域と水域をつなぐ、いわゆる「水辺エコトーン（水陸移行帯）」も両生類にとって非常に重要であり、守らなければいけません。

両生類全般に危機が迫っていることは岐阜市だけでなく、全国的な課題となっていますが、そのことには、「水辺エコトーン（水陸移行帯）」の損失が、両生類の生息地において発生していることが理由の1つとして考えられます。建物や道路の建設、側溝の設置は私たちの生活には欠かせないことですが、両生類の生息地の消滅だけでなく、「水辺エコトーン（水陸移行帯）」の消失の原因にもなっています。

「水辺エコトーン（水陸移行帯）」は陸域から水域への連続性を持った多様な環境を含んでいます。「水辺エコトーン（水陸移行帯）」を保全、あるいは再生することは、両生類だけでなく、カメ類を含む多くの動植物の保全につながり、生物多様性保全には欠かせない大切なことです。



高木 雅紀

5 生物多様性についての課題

岐阜市の生物多様性の現状からは、次のような6つの課題が考えられます。

理解を進める

①周知・啓発、人づくり

岐阜市の豊かな生物多様性を保全するには、市民や事業者はその価値を広く伝えて、次世代へ継承する取組が必要です。このような取組は、「岐阜市生物多様性プラン」の策定後、推進してきましたが、危機的な現状や具体的な課題はまだ十分には知られていないのが現状です。そこで次世代への啓発をはじめ、以下の課題が挙げられます。

- すでに何種かの生きものが市内から絶滅し、420種もの生きものがレッドリストに掲載されていること、特に両生類について絶滅の危険度が大きくなっていることなどを市民、事業者などに広く知ってもらう必要があります。
- 本市に残されている生物多様性の豊かさを周知し、次世代へつないでいく必要があります。
- 生物多様性についての理解を、次世代を中心に周知し続ける必要があります。

保全を進める

②希少種、重要な環境の保全

岐阜市には、希少種とその種を育む重要な環境が保全されている地域が複数ありますが、地域によっては、希少種と重要な環境が危機にさらされています。これらの貴重な種と重要な環境の保全を推進するため、以下の課題が挙げられます。

- 生物多様性保全上重要な里地里山³⁹をはじめ、生物多様性保全が行われている場所を自然共生サイト⁴⁰へ認定するなど、重要な環境の保全を推進する必要があります。

③外来種対策

「岐阜市生物多様性プラン」の策定時においても、外来種による生態系への影響は重要な課題となっていました。外来種対策については、緊急性が高いものから対策を進める必要があり、以下の課題が挙げられます。

- 希少種などへの影響が大きいと考えられる場所において、その場所に生息・生育する外来種対策を推進する必要があります。
- 新たに侵入した外来種について、生態系への影響が特に大きいと考えられる外来種は、早急に対策を推進する必要があります。

³⁹ 生物多様性保全上重要な里地里山：様々な命を育む豊かな里地里山を、次世代に残していくべき自然環境の1つであると位置づけ、環境省が500ヶ所を選定。

⁴⁰ 自然共生サイト：民間の取組などによって生物多様性の保全が図られている区域を環境省が認定する制度。

再生を進める

④生態系再生の推進

近年、岐阜市だけでなく、全国においても、生物多様性の損失が危惧される状況が見受けられます。このような状況を打開し、持続可能な社会を構築するためには、生物多様性の向上につながる生態系再生の取組が必要です。そこでこれらの取組を推進するため、以下の課題が挙げられます。

- 「小さな自然再生」⁴¹、有機農業⁴²の推進など、生物多様性の向上につながる取組を推進する必要があります。
- 30by30 などの実現に向けて、行政だけでなく、企業、教育機関など広い分野にわたって連携し、取組を推進する必要があります。

活用を進める

⑤長良川流域のつながりづくり

岐阜市は、長良川という象徴的な存在とともにその豊かな生物多様性を育んできました。長良川は、上流域から下流域までつながるネットワークを形成しており、長良川の生物多様性を保全するためには、流域全体の連携が欠かせません。長良川の生物多様性保全の推進は、岐阜市単独ではできないものではないため、以下の課題が挙げられます。

- 世界農業遺産「清流長良川の鮎」など、長良川流域の生物多様性に関連する取組について、国、県、長良川流域の市町などと連携し、取組を推進する必要があります。

⑥生物多様性につながる文化・産業の振興

岐阜市の豊かな生物多様性は、地域に根差した多様な文化や産業を育んできました。提灯、うちわ、和傘などの伝統工芸品をはじめ、ぎふ長良川の鶺鴒に関連する文化、産業が代表的なものとして挙げられます。これらの生物多様性につながる文化・産業は、生物多様性の保全を推進しながら、その恵みを利活用する必要があります。そのため、以下の課題が挙げられます。

- ぎふ長良川の鶺鴒などの文化、ぎふ長良川めぐるツアーズ⁴³などの伝統工芸、文化などを体験する取組、池の上みそぎ祭り⁴⁴などの伝統行事、近年、広まりつつある有機農業を含む農業、養蜂を含む畜産業など、多方面にわたって生物多様性とのつながりがあることを認識する必要があります。
- 生物多様性が多方面につながることを周知する必要があります。

⁴¹ 「小さな自然再生」：主に身近な河川、水路などを対象として、人力作業など可能な方法で土木作業を行い、環境再生を行おうとする取組。

⁴² 有機農業：化学的に合成された農薬や肥料を使用せず、遺伝子組み換え技術も使用せずに環境への負荷を可能なかぎり、低減して実施する農業。

⁴³ ぎふ長良川めぐるツアーズ：長良川流域の伝統工芸、文化などを体験したり、学んだりするプログラム。

⁴⁴ 池の上みそぎ祭り：氏子を中心に、鉢巻きふんどし姿で神社から町内を練り歩き長良川で身を清める神迎いの準備の行事。

第3章において、これらの課題について改善するため、目指すべき将来の岐阜市の姿、基本方針と取組について整理し、記載しました。

また取組については、その取組に対する役割を市民、事業者、市に分けて記載しました。



コラム

市民活動と行政、企業との協働

「三者連携」という言葉が、様々な分野で重要視されています。

生物多様性の保全というと、かつては専門家や強い関心のある一部の市民が「自然を保護する取組」として行っており、特に開発事業では対立が生じてしまうことも多くありました。しかし現在では、里山の保全、河川の清掃、在来種の保護活動などに「ちょっと興味のある」人たちによる取組が各地で広がっており、そこには市民だけでなく行政や企業など、多くの方たちが関わっています。



市民協働による登山道整備に向けての事前確認

こうした活動を継続していくためには、ステークホルダーと呼ばれる関係者による協力体制の構築が不可欠です。活動の継続には専門知識や技術、フィールドの確保、人材、資金を要します。ステークホルダーが生物多様性の保全という目的を共有し、対等な関係性を保ちながら各自の強みを活かして役割を分担し補い合うことで、少数の市民で取り組む場合や行政のみで取り組む場合より、大きな成果を生むことにつながっていきます。市民の思い、行政の公共性、企業の専門性などが融合し、連携していく仕組みは今後ますます重要になるでしょう。

野尻 智周